

平成27年 3月13日発行

静岡県

図書館協会

会報 No.65



編集・発行 静岡県図書館協会

静岡市駿河区谷田53番1号
静岡県立中央図書館内

平成26年度 第22回 静岡県図書館大会

「伝えよう図書館の力 広げよう新たな可能性」



第22回となる平成26年度の静岡県図書館大会は、12月8日（月）静岡市駿河区のグランシップを会場に、1,023名の参加者を集めて開催されました。

大会は、曾我廣秀大会運営委員長（浜松市立中央図書館長）の司会により、大澤真明県協副会長（静岡市立中央図書館長）の開会の言葉で始まり、安倍徹静岡県教育委員会教育長、谷野純夫県図書館協会会長（県立中央図書館長）から御挨拶がありました。

続く表彰式では、「読書県しずおか」づくりにおいて意欲的な活動が評価された学校・団体、長年にわたって図書館業務に携わり功労のあった図書館職員及び熱心な活動のあった優良読書グループが表彰されました。

その後、日本図書館協会副理事長の山本宏義氏による情勢報告があり、公共図書館の設置と基盤、管理運営と所管等についての説明がなされました。

午前の最後に行われたライブトークでは、「“本とひと”を結ぶためにできること？～本と出会うためのヒントをあなたへ～」をテーマに、パネリストに幅允孝氏（BACH（バッハ）代表・ブックディレクター）と野尻真氏（静岡書店大賞前事務局長・谷島屋営業本部）、コーディネーターに舟田彰氏（川崎市教育委員会 川崎市立宮前図書館）を迎え、実際にパネリストが行ってきた様々な“本とひと”を結ぶ取組事例を元に意見が交わされました。

午後は、7つの分科会に分かれ、各テーマ別に様々な講演やワークショップが行われました。

なお、表彰された方々は、次のとおりです。（敬称略）

☆「読書県しずおか」づくり優秀実践校・団体（者）表彰

- ・小学校の部 伊豆市立中伊豆小学校
- ・中学校の部 磐田市立城山中学校
- ・高等学校の部 静岡県立沼津工業高等学校
- ・特別支援学校の部 静岡県立清水特別支援学校
- ・団体（者）の部
- 水ようおはなし会 （菊川市）
- 掛川市子どもの読書活動を考える会（掛川市）

☆静岡県図書館協会表彰

- 小松 純代 （静岡県立中央図書館）
- 中山 操 （伊豆の国市立中央図書館）
- 中島 多美子 （三島市立図書館）
- 市川 珠代 （三島市立図書館）

- | | |
|---------|----------------------|
| 佐野 裕美 | （三島市立図書館） |
| 市川 みち子 | （三島市立図書館） |
| 井上 やす子 | （沼津市立図書館） |
| 杉山 昌江 | （沼津市立図書館） |
| 高島 依里 | （沼津市立図書館） |
| 石井 麻紀子 | （富士市立東図書館） |
| 勝亦 晃子 | （富士宮市立中央図書館） |
| 星野 裕美 | （富士宮市立中央図書館） |
| 清 淳子 | （富士宮市立西富士図書館） |
| 野村 貴子 | （富士宮市立芝川図書館） |
| 齋藤 琴美 | （静岡市立蒲原図書館） |
| 岩ヶ谷 いつ子 | （島田市立島田図書館） |
| 鈴木 真理 | （島田市立島田図書館） |
| 河田 幾久美 | （御前崎市立図書館） |
| 川村 美穂 | （御前崎市立図書館） |
| 近藤 経子 | （磐田市立中央図書館） |
| 平野 義久 | （磐田市立豊田図書館） |
| 小野 仁 | （浜松市立中央図書館） |
| 畑 隆 | （常葉大学附属図書館） |
| 小田部 雄次 | （静岡福祉大学附属図書館） |
| 進藤 令子 | （静岡福祉大学附属図書館） |
| 氏原 泰代 | （常葉大学附属図書館浜松図書館） |
| 杉山 潤子 | （常葉大学短期大学部附属図書館之山文庫） |
| 坂本 雅子 | （東海大学短期大学部図書館） |

☆優良読書グループ表彰

- ・（公社）読書推進運動協議会長賞
- すいせんの里読書会（浜松市） 代表 笠原 佐知子
- ・静岡県読書推進運動協議会長賞
- 火曜会（下田市） 代表 加藤 美百合
- 三島市立図書館点訳ボランティアグループ（三島市） 代表 高橋 洋子
- 南中地域読み聞かせボランティア（御殿場市） 代表 菊池 いづみ
- いづみ読書会（富士市） 代表 川嶋 宏子
- おはなしの会 どんぐり（浜松市） 代表 内山 のり子
- おはなしの会 ピロシキ（南伊豆町） 代表 小林 祐子

ライブトーク (抜粋)

舟田 今日「本とひとを結ぶためにできること? ~本と出会うためのヒントをあなたへ~」をテーマに、パネリストの皆さんにいろいろとお話を伺っていきたく思います。

【BACH代表 幅さんの取組】

幅 現在は、本屋を作る仕事、異業種の中に本の小売りのコーナーを作る仕事、病院や企業にプライベート図書館を作る仕事为主な仕事です。基本的に僕がやりたいのは、知らない本を手取る、そして1ページ目を開いてもらえるような機会を作る、それを日常のいろいろな場所に点在させることです。本来、読書というのは書き手と読み手が一対一で向かい合って、そこで行われる精神の受け渡しの本を読む行為だと思っています。書き手と読み手が一対一で出会って、自分の中に深く刺さるような本を、色々なひとに手取ってもらえるように仕事をしていきたいですね。

【谷島屋書店 野尻さんの取組】

野尻 書店が大好きで、本が大好きで、県民の皆さんにお渡しできる良書を、一冊でも多く取りそろえて販売していくことを日々やっています。私が本日お招きいただいた理由は、静岡書店大賞のつながりからだと思っています。静岡書店大賞というのは、通常であればライバルである他の書店との垣根を乗り越えて西から東、静岡の書店員が投票した本と一緒に販売していこうというもので、3年前に始まりました。昨年から静岡県内の図書館で働いている方にも投票をお願いし、今年はさらに学校司書の方にも投票いただいています。地方のオープン文学賞の一つになると思いますが、授賞式には150名以上の関係者に参加をいただいて、小説部門、児童書新作部門、児童書ロングセラー部門、映像化したい文庫部門という4部門の表彰を行い、各部門の大賞受賞作家さんにも御出席いただいております。最近少し注目度が上がりつつあるイベントです。昨年は事務局長、今年は副事務局長としてその運営に携わりました。

【本とひとをつなぐためのアプローチ】

舟田 パネリストの皆さんは「地域」、「ひと」、「まち」というものを意識しながら実際に活動されていて、本を提供するというところに尽力されていると思います。

また、それが楽しくなくちゃいけないという部分も当然お持ちだと思います。これをやってだめなら次はこれというアプローチで、私たち公共図書館員も待っているだけではなく、何か仕掛けられるように考えていかなければならないと感じています。

幅 本を選び取って、それを誰かに薦めるという行為は、実は本が好きなら誰でもできることです。もちろん、今までどおり公共図書館の場合には、アーカイブ業務も重要だと思います。しかし、目の前を通り過ぎるひとに、「これおもしろいですよ」という投げかけを利用者を巻き込みながら行っていくのも手かもしれないと思います。カウンター周辺はあまりプライベートな会話を交わすのはどうかと思いますが、「私語、ウェルカム」みたいな話をした方がいいですよ。やはり言葉は交わさないと。僕もインタビューをしないと本が選べないように、「やあ、〇〇だったんですか」とか、そこからスタートするのではないかと。全体がうるさいと迷惑だから、ある程度機能を分けるべきだと思いますが、うるさい図書館ってすごくおもしろいと思いますね。

野尻 書店というのは、静岡書店大賞のような事業を通して、いい本をお薦めするというのももちろんですが、例えば「店長の本棚」というものを作ったりして、店長はこういう本を読んでいます、こういう本が好きなんですというところを出すと、顔が見えるという部分につながると思います。書店員はシャイな人間が多いので表に出たがらない、自分を出したがるなところがありますが、やはりそういうことを恐れずに、お客様と対話ができる場が見つけられていないので、責任の所在をはっきりさせた棚を作って、そこから本が売れた時には、そのお客様にどう選んでもらったのか、なぜ選んでもらったのかを聞ききっかけにするのがいいと思いますね。

舟田 やはりコミュニケーションを通じて、ひととのつながりを作っていく。アイデア、ヒントを地元から拾いながら、地元らしさ、地域らしさ、自分のまちらしさというものを出しつつ、まちが元気になるところも図書館は担っていると思います。そして、本を情報というものを通じて、市民の皆さんに使ってもらおう、そして本を届けるということを、私たち自身が支えていかなければならないと思います。



コーディネーターの舟田 彰氏



パネリストの 幅 允孝氏 (左) と 野尻 真氏 (右)

情勢報告 (抜粋)

報告者 ^{やまもと ひろよし} 山本 宏義 氏 (日本図書館協会 副理事長)

最初に公共図書館の設置と基盤整備についてです。市、政令市、特別区についてはほぼ100%図書館が設置されていますが、町は61%、村は25%です。今後更に町、村の設置に力を入れる必要があります。日本図書館協会としては、中学校区に1つの割合、現在の3倍ぐらいの館数が必要だと考えています。

今気になるのは、個人貸出数、図書館1館あたりの貸出数、全国トータル貸出数ともここ2、3年減少が目だという事です。やはり資料費の減少やデジタル情報の普及が背景にあると思っています。

現在、公共図書館の専任職員は全体の約3分の1、そのうちの有資格者は52%です。専任が減るのはやむを得ない状況もありますが、今後とも質の向上に努めていく必要があります。

次が公共図書館の管理と所管です。日本図書館協会の調査によれば、図書館の数では12%、自治体の数では10%ぐらいが指定管理で図書館を運営しています。業務委託も進んでいると思われれます。専任の職員が減って、その分を業務委託や指定管理という形で補っているという状況がより顕著になってきています。

もう一つは、首長部局への業務移管の増加です。40の自治体、168の図書館で首長部局がその業務を行っている(『LRG』8号(2014))ということに注目したいと思います。

次は障害者サービスの問題です。「障害者差別解消法」が、平成28年4月1日に施行されます。この法律は、障害者のすべての生活にわたって差別をなくすことをうたった法律です。あらゆる障害者が、いつ図書館を利用しても不自由をきたさないように、差別を解消する対策をきちんと準備する必要があります。

平成26年6月20日に学校図書館法が改正されました。第6条に「学校司書」が明記され、専任という規定が盛り込まれました。この改正によって「学校司書」の配置率の改善が進むことを期待しているところです。

また、附則には、国に対して資格、養成についても至急に検討しなさいとあり、文科省を含めて緊急の課題になっています。

最後に、国立国会図書館についてです。「私たちの使命・目標2012-16」の目標2については、納本という考えの中にデジタル資料やインターネット資料の収集が加わりました。もう一つは目標3に関わる図書館向けデジタル化資料の送信サービスです。現在の登録は360館程度ですが、未登録の図書館はぜひ登録していただいて、利用者の便宜を図っていただきたいと思います。



山本 宏義 氏

分科会

第1分科会【図書館サービス】

「Webから図書館の可能性を拓く
～図書館をもっと楽しくするWebサービス～」
(参加者74人)

講師 ^{よしもと りゅうじ} 吉本 龍司 氏 ((株)カーリル 代表取締役)

市町村や都道府県を越えて図書館の蔵書の横断検索ができる日本最大の蔵書検索サイト「カーリル」を運営する(株)カーリルの吉本龍司氏にお話を伺った。

2010年3月からサービスを開始したカーリルは、現在全国6,605の図書館に対応、公共図書館の93%を網羅しており、1か月あたり約50万人に利用されている。

コンピュータと出会って20年、現在エンジニアとして活躍する吉本氏だが、その一方で図書館との関わりは殆ど無かったという。しかし郷土史への関心が強く、高校時代には故郷の郷土史料を自ら作成。その過程で複写依頼や図書館のデータベースを利用し、「図書館はWebで使うもの」と考えていた。また、行政に係るシステムに携わっていた時期に図書館のWebサービスに触れ、その利用頻度の低さに図書館の「やる気の無さ」を感じていた。

その後、2010年のWebサービス開発合宿にて吉本氏は図書館に着眼。「どうすれば自分たちが図書館を使えるか」という視点から、Web-OPACのデータを解析、統一し、横断検索を行うシステムを作成した。こうして「わかりやすい、楽しい、使いやすい、速い」をコンセプトに、従来の図書館Webサイトとは異なる「空・雲」をイメージしたデザインと「本を借りる(でもそれだけではない)」を意識した覚えやすい名称を冠したカーリルが誕生した。現在も、新設館の情報や所蔵状況等は絶えず最新のものに更新され運用されている。

カーリルの課題としては、収集した図書館のデータをカーリルで使用する事への社会的合意とライセンスの形成という点が挙げられる。ちなみにカーリルはAPIを無償提供、これを活用したアプリ等を誰でも開発できるようにしている。

また、ISBNが無い資料や専門図書館の資料、地域資料等ユニークな書誌を持つ資料の検索に弱いことも課題である。こちらの解決には図書館と協力して取り組みたいと考えている。

カーリルでは「図書館をもっと楽しく」をテーマに、屋内位置情報を活用した書架のナビゲーションや、配架図をデータ化して本を探しやすくする「haika」プロジェクト、データ分析による選書・除籍の支援等、ユーザーや図書館へ向けた様々な新しい取組みが行われている。また、Amazon等のウェブ上の書店との連携も重要であるとしている。

カーリルが目指すのは、世の中から図書館がディスカバリーされるサービス。そして図書館は持っている知識を活かし、もっと新しい挑戦をしていくべき。図書館の要望がカーリルの技術で実現することもある、互いに協力し合っていきましょう、と吉本氏は呼びかけた。



吉本 龍司 氏

第2分科会【児童に対するサービス】

「小学生への読み聞かせ
～がんばれ！児童図書館員＆ボランティア～」
(参加者165人)

講師 ^{すぎやま} 杉山 ^こ きく子 氏

(元都立多摩図書館職員・児童図書館研究会運営委員長)

小学生への読み聞かせについて、講師の杉山きく子氏に以下のようなお話をいただいた。

『子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究 報告書』(H26.国立青少年教育振興機構)において、子どもの頃の読書は人生を豊かにするといったデータが出ている。読書の楽しさを享受した大人に支えられて本が好きになった子どもは、大きくなってまた次の世代へ読書の楽しさを手渡していく。

子どもの読み方は大人とは違い、主人公の体験は自分の体験である。一冊でも良いから特別な本と出会って欲しい。子どもに本を読ませるのではなく、本を通して楽しい豊かな時間を過ごしてもらうことが大人の仕事である。何でも良いからたくさん読めばいいというものではないし、新しい本だから今の時代の子どものに合っているとも限らない。なぜなら、子どもの求めるものは普遍性を持っているからである。長年読み継がれてきた、起承転結のはっきりした、まっすぐなストーリー展開が物語の定番であり、登場人物に厚みがある本を小学校の中学年高学年のうちに読んであげたい。

ボランティアに携わる人は、定番絵本を再読し、自分のものさしを作ること。信頼の出来るブックリストから選ぶのも良いし、図書館側はそれらを揃えておくことが大切である。

絵本は、絵と文が重なって初めて物語が成立する(紹介絵本：『ハンダのびっくりプレゼント』)。しかし絵本にも限界があり、多人数には向かないものもある。ストーリーテリングは絵本にもまして子どもの心をつかむ。言葉だけで話を楽しむには昔話が最適である(『子どもに語る中国の昔話』)。

読み聞かせから読書への道筋として、学校での読み聞かせが終わった後に、読んだ本をそばに置いておくなど、楽しかった余韻のまま本と触れ合える機会を増やすことや、高学年向けのおはなし会の実施などが挙げられる。

子どもはにぎやかでお手軽なものばかりが好きだと思われているが、実はそれらとは反対の、重いものや強い力を備えたものにも惹かれていることに気づいて欲しい(『世界でいちばんやかましい音』)。



杉山 きく子 氏

第3分科会【子どもと読書】

「武田美穂ワールドへようこそ！～えほんは楽しい～」
(参加者301人)

講師 ^{たけだ みほ} 武田 美穂 氏 (絵本作家)

『となりのせきのますだくん』などの絵本で知られる作家・武田美穂氏に講演をしていただいた。

手元を檀上のスクリーンに写し、「自己紹介」として「がんこちゃん」を描いたり、参加者と掛け合いながら絵本を読むなど、会場が一体となり楽しめた講演会だった。

前半は、以下のような参加者からの事前質問に答える形で進められた。

・「本はどうやって作るのですか？」

質問への回答として、発売前の『わすれもの大王』の制作過程が披露された。

絵本の構想はまず、起承転結の「起」と「結」が浮かぶことが多いが、この絵本は5年程、「結」の部分が決まらなかった。忘れ物は子どもにとって永遠のテーマ。学校に呼ばれて訪問する際、どこの子どもたちに聞いても盛り上がる話題で、そのような話を聞き、構想を練っていった。ラストは「友達と協力して忘れ物がなくなった」というだけでなく、笑えるものにしたかったので、今回の結末になった。また、最後の絵ができたところで、既に仕上げていた後半の絵を捨て、描き直した。編集者には「この時期に捨てて間に合うのか」と驚かれたが、絵が残っているとそれに頼ってしまうので、自分を鼓舞するためにも思い切った。このように毎回、創作時には編集者に心配されたり、喧嘩をしながら試行錯誤して作成している。

・「絵本作家になろうとしたきっかけは？」

20代半ばに図書館でアルバイトをしていた時、素晴らしい絵本の数々を目にした。自分が子どもの頃より絵本が表現媒体として成熟していることに驚いた。その中で出会った、シュルヴィッツの『よあけ』(福音館書店刊)に感動し、作品の投稿を始めたのがきっかけ。当初はうまくいかず、持ち込み先に酷評され、泣いて帰ったこともあった。

・「小さな子に喜んでもらうために気をつけていることは？」

気をつけるのは、言葉づかいや、日本語としてきちんと成立しているかということ。見直す過程できつと感じた表現は省いている。読後に「明日も明るくて、みんな良い人だよ」という気持ちになってもらえるような作品にしたい。

後半は、「たべもの絵本シリーズ」の静岡版『しずおかぎょうぎ』を創作した。どういう手順で作るか、必要な材料は、など会場の意見を次々と取り入れ、即興ながらもテンポの良い作品が完成した。

その他、『ありんこぐんだん わははははは』、『オムライス・ヘイ!』、『かっぱぬま』などの読み聞かせもあり、「武田美穂ワールド」を堪能できた。



武田 美穂 氏

第4分科会【図書館とユニバーサルデザイン】

「シニア向けサービスを考える
～大人のための楽しい図書館活用講座の実践から～」
(参加者68人)

講師 葉山 (三村) 敦美 氏

(神奈川県座間市立図書館 主幹 (司書))

シニアの関心事は健康介護問題から社会活動など様々であり、自ら調べることに意欲的だ。しかし、図書館の使い方や使いこなす力もまた様々である。図書館が身近になれば調べる力もついてくるし、図書館はシニアにとっても「第3の場所」として相応しい。

「シニアサービスの四つの機能」には、「サードプレイス機能」、「教育機能」、「ケア機能」、「サロン機能」がある。これまでのシニアサービスのイメージは主に「ケア機能」の部分を中心に捉えていた。シニア世代の在り方は様々で、高齢者へのサービスを一括りにするのはなく、状況に応じた支援が求められる。

座間市では市全体の読書環境を良くする一つの手段として、「調べる学習」を進めてきた。紐帯も図書館なら可能だ。「なるほど図書館塾」を始め「としゃかんたんけん大作戦」、「NIE講座」を経て「大人のための楽しい図書館活用講座」を展開、公民館で開講している「あすなろ大学」と協働して行っている。大人向けの「調べる学習講座」を行う際の課題への取組として、主催者側としては継続的・系統的に「調べる学習」の指導者を養成すること。参加者に対してはブックハンティングやインタビュー体験で敷居を下げるなど、プライドや人生経験を尊重したプログラム・テーマの設定を心がける。レポート相談やプログラムの組み方などには申込者の状況把握も必要だ。次のステップに向けては、「調べる楽しみがわかる」、「見知らぬ同士のコミュニケーション」、「まとめて発表」をしていくことでシニアは自信を持つ。主催者側はシニア世代の特徴を理解しながらサービスを広げていくことだ。図書館は計画をもってそのなかで色々なサービスを行っていく。計画自体にシニア世代にも関わって頂くことでシニアサービスもより充実したものになっていく。

最後に、シニアサービスを考える際には、シニアサービスの機能は四つあることを念頭において頂きたい。高齢者だからケアするという発想ではなく、四つの機能のなかで自分の館では何からできるのかを考えていくことが一番の眼目であり、最終的には四つの機能が満たされるのが理想ではないか。

資料紹介：三村敦美.シニア・サービス考「自己学習機能」の実践例を中心に.現代の図書館52(3), 2014-9, p.137~148.



葉山 (三村) 敦美 氏

第5分科会【読書活動】

「読書が育む脳
～なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか～」
(参加者153人)

講師 酒井 邦嘉 氏

(東京大学 大学院総合文化研究科 教授)

言語脳科学の研究者で「脳は紙の本で鍛えられる」と提言する酒井邦嘉氏(東京大学 大学院総合文化研究科 教授)に「読書が育む脳～なぜ『紙の本』が人にとって必要なのか～」をテーマにお話しいただいた。

読書は①言葉の意味を補う「想像力」が身につく。②自分の言葉で「考える力」が身につく。③読んで味わった経験を脳に刻むことができる。これらのことが自然に行われ、脳は成長し、変化し、創られていく。

インターネットが普及し、調べることに追われ考えなくなることは大問題である。本は自分で考えなければならぬ部分が残されている。「ウェブより本を」と考え直さないと大変な時代になると危惧している。

大学は考える場を提供するところであり、公共図書館の役割は多様な本の世界に誘う貴重な入り口であり、考える場を提供するところでもある。

読書や日常の会話は言語を介して行われるが、いちばん大切なことは目に見えない心である。我々は言語を通して他人の心を知ろうとしている。心を育てることで、脳は育まれる。それには目に見えない部分に対して想像力が必要。あくまでも言語は入り口だということ忘れてはならない。

小学生の「デジタル機器に対する心配」の調査から保護者は目に見えない言語や心に関わる影響をあまり心配していないことが分かった。いずれ子どもの学力や心の発達に影響がじわじわとくる。その事に保護者が気づいていないことは、危機的状況である。心をどう育てるか、言葉は身についているか、どう活用しているか大人が意識を払わなければいけない。

電子書籍と紙の本はそのよさを知り、使い分けが大切だが、文明が進歩しても大切なものは変わらない。自動車があっても自転車はなくなるのと同様、築き上げてきた文化は簡単に凌駕されない。電子書籍と違い、紙の本は大きさ、厚さ、紙の質、そういうこと全てが文化である。視覚だけでなく、匂い、手触り等々、心に残る手がかりがあり、五感に訴える力をもつ「紙の本」。このことだけでも紙の本は、電子化に負けない!

「活字を読むことは、単に視覚的に脳にそれを入力するだけではなく、足りない情報を能動的に想像力で補い、曖昧な部分を解決しながら『自分の言葉』に置き換えるプロセス」であることを、脳のしくみ、脳の働きとともに再認識できたお話だった。



酒井 邦嘉 氏

第6分科会【学校図書館】

「今、求められている学校図書館活用の在り方
～学校図書館に関わる人たちの効果的な
連携を考える～」

(参加者122人)

講師 ^{わたなべ のぶえ} 渡辺 暢恵 氏 (東京学芸大学 非常勤講師)

「この図書室の本を全部読んでいいのよ。」
分科会は渡辺氏自身が小学校時代に会った学校司書
とのエピソードから話がスタートし、主に学校司書の
役割や具体的実践について展開していった。

「学校図書館専門職としての学校司書を求める声は
大きかったが、平成26年6月27日、ようやく学校図書
館法が改正され、学校司書が法制化された。努力義務
ではあるけれど、これは大きなチャンスです。これか
らやっていくことが学校司書のやるべきことになる。
やっつけられないことはない。見せてくれと国は言っ
ているのです。」これは、参加者を大いに勇気づける言
葉であった。さらに「今回の法改正によって、学校図
書館の機能は、学習センター・情報センター・読書セ
ンターの3つとなり、学校司書には教育者としての立
場、意識が期待されている。教育のプロとしての意識
を持ってください。学校司書には学校を変えるだけの
力があるのです。蓄積された情報を発信してください。」
という言葉とともに学校司書のあり方や役割について、
具体的な資料と実践事例が数多く紹介された。

「読書には段階があります。ネットと読書は敵対す
る関係ではなく、どちらも基本は「読む」で、学校司
書はコンピュータ室をもテリトリーとしましょう。ボ
ランティアの方に任せると司書のすることの棲み
分けをし、「好きな本を読みましょう」では子どもは
本を読めるようにはならず、ここに学校司書のやるべ
きことがあるのです。」と多くの示唆をいただいた。
また、学校図書館活用年間計画、調べ学習支援も紹介
され、教員と学校司書、ボランティアが連携する姿勢
についても言及された。

後半は、東京都江戸川区における「読書科」の取組
として、読書表現プロジェクトにおける「読書会」の
方法、調査発表スキル学習プロジェクトにおける公共
図書館との連携や学校司書の必要性について話され、
その中で、学校長のリーダーシップや校内の連携体制
についても具体的に教えていただくことができた。

最後のブックトーク(柏葉幸子さんの本から)では、
参加者全体が渡辺氏の語りと物語の世界に引き込まれ、
夢のような時間を共有できた。明日からの希望となる、
「力」をいただいた、あっという間の2時間半であっ
た。



渡辺 暢恵 氏

第7分科会【大学図書館】

「学修を支援する読書推進活動
～帝京大学のく共読ライブラリー>
プロジェクトにおける読書推進の取り組み～」
(参加者48人)

講師 ^{なかじま やすし} 中嶋 康氏

(帝京大学メディアライブラリーセンター グループリーダー)

講師 ^{なかみつ つねこ} 中満 恒子 氏

(帝京大学メディアライブラリーセンター チームリーダー)

ワークショップ担当 ^{かのうが かおる} 叶賀 佳織里 氏

^{さいとう ゆり} 齊藤 友李 氏 ^{ほりの さだみ} 堀野 貞美 氏 ^{たつき かなこ} 立木 加奈子 氏
(帝京大学メディアライブラリーセンター職員)

大学生の活字離れが著しい昨今、学生にどのように
本との関わりを持たせ、読書を習慣化していくのか、
大学図書館としても大きな課題の1つとなっている。

その中で全学的に読書推進プログラムを展開し、学
修支援活動に取り組んでいる帝京大学メディアライ
ブラリーセンター(MELIC)の中嶋康氏に共読ライ
ブラリーについて、講演をしていただいた。

共読ライブラリーとは、学生に本を読むきっかけを
つくり、読書を通じ、学ぶ力を身につけることを目的
としている。2012年から4年計画で始めたもので、
「読み合い、薦め合い、話し合う」をコンセプトに黒
板本棚(MONDO書架)、共読サポーター、共読環境、
読書術コースの4つのプロジェクトで構成されている。

MONDO書架は、黒板本棚を使い、お薦め本につ
いてゲストや教員と問答することにより、本の魅力を
伝える仕掛けとなっている。

学生による共読サポーターは、MONDO書架つくり、
ビブリオバトル開催、OPACリコメンド作成など
多彩な活動を行なっている。

読書術コースでは、授業と連携し、「目次読書法」
など能動的に本を読む方法を学ぶためのプログラムを
オンライン上で受講する。さらに情報編集力も身に付
けさせるプログラムになっている。

最終的にこれらのプロジェクトを循環させ、大学全
体で読書する仕組みをつくることにより、学生が、社
会へ出ても自主的に読書を続けるきっかけに繋がる
ことを望んでいる。

その手法を学ぶため後半は、MELICのスタッフに
よる読書術ワークショップが行なわれた。自分が興味
のある本を選び、3人1組で「目次読書法」により本
の紹介をし合った後、本の内容を表現する最適なキャ
ッチコピーを作成した。短時間であったが、情報編集の
手法を体感することで、手にした本に新鮮な出会いと
気づきの発見があった。



中満 恒子 氏 (左) と 中嶋 康氏 (右)

平成26年度 総会報告

平成26年度の静岡県図書館協会総会が、4月18日に静岡県立中央図書館で開催され、下記の6件の議案が承認されました。

- 第1号議案 役員承認の件
- 第2号議案 平成25年度 事業報告の件
- 第3号議案 平成25年度 決算報告・会計監査報告の件
- 第4号議案 平成26年度 事業計画の件
- 第5号議案 平成26年度 予算の件
- 第6号議案 静岡県図書館協会表彰規定の改定について

<平成26年度静岡県図書館協会役員>

理事	会長	谷野 純夫	(静岡県立中央図書館)
	副会長	大澤 眞明	(静岡市立中央図書館)
	副会長	曾我 廣秀	(浜松市立中央図書館)
		宮下 義雄	(沼津市立図書館)
		橋本 眞明	(富士市立中央図書館)
		成岡 均	(藤枝市教育委員会 教育部図書課)
		内藤 久仁英	(湖西市立中央図書館)
		内山 淳子	(東伊豆町立図書館)
		高松 良幸	(静岡大学附属図書館)
監事		山田 秀一	(裾野市立鈴木図書館)
		伊藤 八重子	(磐田市立中央図書館)

※加盟館名簿順

<平成26年度事業計画>

- 会議・大会
- 理事会 第1回(4/18) 第2回(9月初旬・文
書による決裁) 第3回(2/13)
- 総会兼館長会(4/18)
- 相互貸借担当者会議(5/9)
- 静岡県図書館大会(12/8)

研修・視察

- 図書館基礎研修(5/8)
- レファレンス基礎研修(5/14・5/22・5/29・6/5)
- 児童・青少年サービス研修、総合研修(6/19・6/20)
- ※ 関東地区公共図書館協議会研究発表大会に組み込み実施
- 大学・専門図書館研修(7/18)
- 情報サービス研修(9/25)
- 図書館運営研修(10/3)
- レファレンス応用研修(10/16・予備日 10/22)
- 視察研修(11月～12月)

出版

- 『加盟館職員名簿』・『会報No.65』・『静岡県図書館大会記録集』

専門委員会

- 資料専門委員会 年3回開催
- 図書館大会運営委員会 年5回開催

<平成26年度予算>

収入総額並びに支出総額3,480,000円の本年度予算が承認されました。

子ども読書活動で河津町立文化の家とおはなしぶらんこ(森町)が文部科学大臣表彰を受賞しました

文部科学省では、毎年、4月23日を「子ども読書の日」とし、記念事業として「子ども読書活動推進フォーラム」を開催しており、合わせて子どもの読書活動優秀実践団体に対する文部科学大臣表彰を行っています。平成26年度は、図書館の部で河津町立文化の家が、団体(個人)の部でおはなしぶらんこ(森町)が大臣表彰を受賞しました。

～子どもたちが読書に親しむために～

河津町立文化の家

河津町立文化の家では、幼い頃から本に親しむ習慣がつけばその後も継続する、という考えから、関係機関やボランティアの皆さんの協力のもと、4か月児対象のブックスタート事業、0～2歳児、2～3歳児、幼児、小学生を対象とした“おはなし会”、希望者を町の公用車で送迎する“図書館へ行こうキャンペーン”、囲炉裏を囲んで語りを聴く“河津の昔話をききに行こう”、小学校での“ブックトーク”や団体貸出の選書等、様々な取組をしています。

今後も子どもたちが読書に親しむための機会の提供や啓発事業に積極的に取り組んでいきます。

(河津町教育委員会 社会教育係 主事 進士 麻実)



河津町立文化の家

～お話の世界を楽しむ子どもたちと一緒に～

森町・おはなしぶらんこ

読み聞かせの大切さを子どもや親たちにも伝えたいと平成元年から始め27年、現在17名で活動しています。図書館に来館する幼稚園児や毎週土曜日の乳幼児対象の児童館での読み聞かせ、高校での読み聞かせなどを実施しています。また、七夕会やクリスマス会での舞台装置、衣装などは会員の手作りです。今後も受け継がれてきた歴史を守り、目を輝かせて、お話の世界を楽しむ子どもたちと一緒に成長して行きたいと思っています。

(おはなしぶらんこ 堀内 澄代)



おはなしぶらんこ・森町

関東地区公共図書館協議会総会・研究発表大会開催

平成26年度関東地区公共図書館協議会総会・研究発表大会が平成26年6月19日（木）から20日（金）にかけて静岡市駿河区のあざれあを会場に開催され、県内外の図書館職員など計113人が参加しました。

総会では、(1)平成26・27年度役員改選について、(2)平成25年度事業結果及び決算について、(3)平成26年度事業計画案及び予算案について、(4)平成27年度研究集会・関係諸会議等の開催計画について、それぞれ承認されました。



県立中央図書館職員の事例発表

研究発表大会は、大会テーマを「図書館からの地域情報発信と地域連携」とし、県立中央図書館と共催で児童・青少年サービス研修、総合研修と兼ねて開催されました。講師に静岡大学特任教授の平野雅彦氏、児童文学者で家庭文庫「トモエ文庫」を主宰する草谷桂子氏、静岡書店大賞前事務局長の野尻真氏を招き講演いただき、また、県立中央図書館職員による事例発表も行なわれました。

大会終了後には、希望者による県立中央図書館の施設見学を行い、23人が参加しました。大会の参加者からは、「様々な立場の方からお話が聞けたことがよかった」、「いずれの発表も自館の運営の参考になるテーマでした」、「地域資料、デジタル化について役に立った」等の感想をいただきました。

職員研修報告（公立図書館等職員研修） ※平成27年2月現在

例年、県内図書館職員の、専門的資質・能力の向上を図るとともに、県内図書館サービスの向上・発展を目指し、研修を実施している。図書館の枠を越え視野を広げることで、新たな発見をしつつ、参加者同士の情報交換も行えるよう努めました。

(1) 基礎研修

ア 基礎研修（基礎理論・実務）

期 日	平成26年5月8日（木）	会 場	静岡県立中央図書館	参加人数	100人
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 「図書館職員の基礎知識」 静岡県立中央図書館 企画振興課長 「図書館サービスと著作権」 静岡県立中央図書館 調査課地域調査係 「～気持ちよく図書館をご利用いただく～接遇とコミュニケーション」 コミュニケーションハウス 代表 坂倉 裕子 氏 				

イ レファレンス基礎研修

期 日	平成26年5月14日（水）/22日（木）	平成26年5月29日（木）	平成26年6月5日（木）
会 場	静岡県立中央図書館	静岡県総合教育センター	三島市立図書館（生涯学習センター）
【地区】	【中部地区】	【西部地区】	【東部地区】
参加人数	32人/15人	24人	21人
内 容	「初級レファレンス」 静岡県立中央図書館 調査課 一般調査係職員		

(2) 専門研修

ア 児童・青少年サービス研修 ※平成26年度は「関東地区公共図書館協議会総会・研究発表大会」と兼ねた。

イ 大学・専門図書館研修

期 日	平成26年7月18日（金）	会 場	日本大学国際関係学部図書館	参加人数	37人
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 「日本大学国際関係学部の試みー 国際機関資料室、ラーニング・コモンズなど」 日本大学国際関係学部図書館事務課長 西ヶ谷 洋司 氏 「能動的な学習を導く図書館環境と人的支援ー 学習支援で存在感を示すために」 同志社大学 学習支援・教育開発センター事務局長 井上 真琴 氏 				

ウ 情報サービス研修

期日/参加人数	平成26年9月25日（木）/29人	平成27年1月23日（金）/29人
会 場	静岡県立中央図書館	
内 容	「講義と実習『明日から出来る「資料保存の基礎技術」』」日本図書館協会資料保存委員長 眞野 節雄 氏	

エ 図書館運営研修

期 日	平成26年10月3日（金）	会 場	静岡県立中央図書館	参加人数	23人
内 容	「講義・ワークショップ「入門・図書館サービス計画のつくりかた」」愛知県田原市図書館長 豊田 高広 氏				

オ レファレンス応用研修

期日/参加人数	平成26年10月16日（木）/20人	平成26年10月22日（水）/18人
会 場	静岡県立中央図書館	
内 容	「法情報の探し方」「レファレンス演習」静岡県立中央図書館 調査課 一般調査係職員	

カ 総合研修 ※平成26年度は「関東地区公共図書館協議会・研究発表大会」と兼ねた。

(3) 特別研修

ア 県外視察研修

期 日	平成26年11月12日（水）	参加人数	21人
視 察 館	公益財団法人 東京子ども図書館		

(4) 関東地区公共図書館協議会・研究大会

期 日	平成26年6月19日（木）～20日（金）	会 場	静岡県男女共同参画センター「あざれあ」
参加人数	63人/50人		
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 「静岡からの情報発信～幼児指導絵本『あそび』について」 静岡大学特任教授/客員教授 平野 雅彦 氏 「『静岡県史』収集資料の活用～『授業の種』と『伊豆歴史散歩』」 静岡県立中央図書館 歴史文化情報センター 石井 一則 氏 「富士山関係資料のデジタル化について」 静岡県立中央図書館調査課 菊地 倫太郎 氏 「家庭文庫から友の会まで～静岡の図書館支援活動～」 児童文学者・家庭文庫「トモエ文庫」主宰 草谷 桂子 氏 「静岡書店大賞の取組み」 前静岡書店大賞事務局長 野尻 真 氏 		